

ドクターNAKAMURAの 健康道場



Vol.51
愛煙家 42 歳
古川翔

42歳。何のとりえもない普通の工場労働者。3交代制で昼も夜も働いている。古川翔。高校を卒業して、社会人となりひたすら働き続けている。型通りの人生を歩んできた。

一人娘の聖夜がいる。クリスマスの日に生まれたので聖夜と名付けた。妻の美穂と相談して、聖なる夜に生まれてきたこの子にささやかなプレゼントとしてこの名前を付けた。

土日もなく働き、休みが不定期で、一家団欒で休日を過ごすことなんて年に数えるくらいしかない。休日は特にすることもなく、ぼ〜とテレビを見て過ごし、そして、タバコを吹かすくらいが唯一の楽しみでしかない。

「古川さん。いよいよ工場も分煙になるそうですよ。」同僚の山下が声をかけてきた。

「住みにくい世の中になったな。」

「この間の安全衛生委員会で衛生管理者の志波さんが言っていました

よ。」会話に入ってきたのは若手の陽気な芳川だ。「なんでも、受動喫煙が問題になっているんですって。」

「古川さんはヘビースモーカーだけど規則はきちんと守ってますか。」

「何を言うとんや。そのあたりのマナーはきちんとしとるで。携帯灰皿ももって、人様には迷惑をかけないようにしとるよ。」

「山下さんはちゃんとしとるん？」古川が自分に降りかかった灰を振るうかのように山下に話題をふった。

「そこまではしとらんけど、気は付けるようにしとるよ。」

「僕ね、めちゃくちゃ腹が立つんですよ。車からタバコの吸い殻を捨てる奴を見ると。思わず降りて行って捨てた吸い殻を車の中に投げ返してやりたくなるんですよね。」

「さすがよっちゃん。よっ、若手のホープ！必ず清掃ボランティアに参加するだけあるね。」

「誰だってきれいな方が気持ちがいいでしょ。ところで、古川さんは禁煙しないんですか？この間、金欠とか言ってたじゃないですか。」

「俺ね、これが一番の憩いなんよ。自分が嫌な思いをしてまで、タバコをやめようとは思わんのよ。」

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科
(県立中央病院 前)

院長 中村陽一